

## 第22回諜報研究会プログラム

特集：日本をめぐるIBMのインテリジェンス事件

司会：河野通之（インテリジェンス研究所理事）

内容：

最先端のIT企業の開発商品にはその秘密情報をめぐる国家間の、インテリジェンス機関間の熾烈な攻防が展開される。

### （1）戦前編

山本武利（インテリジェンス研究所理事長、早稲田大学・一橋大学名誉教授）

「IBM日本元代表のアメリカ情報機関への漏洩情報」

14:00-15:00

戦前のIBM日本支社には日本軍が戦闘機開発のために専門将校を接近させた。工場火事に偽装したり、フィリピン前線で米軍使用の鹵獲機械を海軍が神戸製鋼所に持ち込んだりした。一方米軍はニューヨークで初代代表からカスタマー情報を入手して、使用工場への戦略爆撃に利用した。代表その人がインテリジェンスがらみで米軍の意向で秘密裏にIBM代表になった経緯がありそうだ。

### （2）1980年代編

吉澤康文（元日立製作所主管研究員、前東京農工大学大学院教授）

「知財意識の日米格差が生んだIBM産業スパイ事件とその火消し」

15:15-17:00

1960年代にIBMは社運をかけ開発したSystem/360により世界市場をほぼ独占する。1970年代になると性能と機能を飛躍的に向上させたSystem/370を発表する。日本のコンピュータメーカーの技術力も上がり部分的には米国を追い越せる状況にあった。

だが市場を席卷したIBM機で動作する膨大なソフトウェア資産が既にユーザーに蓄積されていた。この状況からIBM互換路線（PCM）を競合他社は開発せざるを得なかった。

当初はソフトウェアに知的財産権の概念が無くIBMのOSを容易に入手しPCMベンダはIBMの市場に食い込めた。しかし1981年に米国ではソフトウェアの著作権が法的保護となり契約なしにIBMに関する情報の利用ならびに入手は違法行為となった。

日立・三菱電機が密かにIBMの情報入手を企んでいることを察知したIBMはFBIに捜査を依頼し、協同しておとり捜査の手法を使い日立・三菱の犯罪を暴く。これがIBM産業スパイ事件である。刑事・民事訴訟とその結末を現場作業員の観点から報告する。